

寺子屋トーク第50回イベントレポート

弘本由香里（大阪ガス エネルギー・文化研究所 客員研究員）

旧来型の地域や家族の規範に拠って命脈を保ってきた、伝統宗教の枠組みの中に位置しながら、個人化する社会の変化を敏感に自覚的に受け止め、個人化する社会にどうコミットすべきか、現代に生きる宗教施設や活動のあり方を模索してきた（している）のが、應典院という寺院だと説明しても、おそらく間違いではないだろうと思う。人生の完成期をサポートしようとする試みや、表現活動を通じた個々人の尊厳の回復などは、象徴的な取り組みといえるだろう。その意味で、應典院再建10周年を迎えた今年、寺子屋トーク50回の節目に、「社会の個人化と個人の宗教化」を「スピリチュアリティ＝新霊性文化」の概念によって論じる、島園進氏（東京大学大学院人文社会系研究科教授）を講師に迎えられたということは、実に自然な流れとして受け止められた。

島園氏が述べられているように、社会のグローバル化や個人化を引き金に、日本をはじめいわゆる先進国と呼ばれる国々で、個々の人生やアイデンティティのあり方と、社会規範や公共性のあり方、宗教あるいは宗教的なものとの関係性は希薄化している。それらは、いったん個々のスピリチュアリティのあり方に還元されながらも、再度社会における集合的な心理や行動の多様な姿をとって現れ解釈されつつある。第50回寺子屋トークの背後には、そうした社会の大潮流をふまえ、應典院の諸活動が持つ現代的な意味を、伝統宗教を含む歴史的な視野の中で相対化して位置付け、今後への指針としていきたいという願いもあったのかもしれない。

広い視野、長い歴史の中で、目の前の事象を捉えるという意味で、島園氏の講演を通した問いかけは実に有効なものであったと思う。一方で、その問いの真意とは逆に、「スピリチュアリティ」のミステリアスなイメージのみに、世間が目を奪われやすい点に、多少の危惧もぬぐえない。人間が精神的な存在であることは、誰にも否定はできない。むしろ、精神的な存在であるが故に、個人の問題をいかに社会の問題として公共化していくことができるのか、という命題との関係性に目をむけるべきだろう。「議論はこれからというところでこの場を終えねばならないのが残念。スピリチュアリティという言葉で、決して簡単にわかった気になってしまうようなものではないことがよくわかった」という、秋田光彦氏（應典院住職）の閉会の一言に今後への抱負が込められているように感じた。